

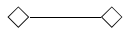
JRに運休や遅れ

イザベラ・バード秋田の旅（1）雄勝峠・院内編

2018年1月15日 掲載



1878（明治11）年7月18日、本県入りしたイザベラ・バードは疲労困憊（こんぱい）していた。山形県の金山を出発して12時間。羽州街道の県境越えで最後に立ちふさがったのは、「箱根の如（ごと）き難関」と言われた雄勝峠だった。

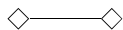


6月10日に東京を出発して以来、バードは数々の峠を越えてきた。江戸時代と同様、人馬しか通れない場所がほとんど。だがこの頃、各県で新道建設が急速に進行。近代化の槌音（つちおと）はバードの背後に迫っていた。

「日本奥地紀行」によると、バードは院内（現湯沢市）の宿で同宿の技師たちから県境の雄勝峠と主寝坂（しゅねざか）峠に隧道（ずいどう）（トンネル）を通す計画があることを聞く。彼らはバードに完成すれば、東京から久保田（秋田市）まで人力車や軽馬車でも行けるようになると説明した。

技師らが話していたのは、金山と院内を結ぶ雄勝新道だ。「秋田県史」などによると、1877年に秋田・山形両県令名で国に申請。バードが来県した2カ月後の78年9月に着工した。だが技術的な問題などでトンネル建設は断念。代わりに掘割工事などが行われ、80年に完成した。

雄勝峠の整備はその後も続き、1955（昭和30）年に峠を貫くトンネルが完成。81年には現在の国道13号と雄勝トンネルが造られた。今や金山―院内間は車で半時間の距離。かつてバードが歩いた羽州街道や雄勝新道は、時代とともに地図からも人々の記憶からも消えていった。



2010年と11年に行われた湯沢市の「ゆざわジオパーク」の学術調査で、約60年ぶりに雄勝新道の本県側ルートが確認された。調査した同市ジオパークアドバイザーの佐々木詔雄さん（74）＝埼玉県川口市＝によると、新道は沢に沿って造られ、切り立った崖や沢渡りする箇所も。頂上付近はつづら折りの道の難所だ。江戸時代に描かれた羽州街道の絵図にも峠付近につづら折りの道があり、佐々木さんは「新道は羽州街道を利用して整備されたはず。羽州街道のルートは分からないが、新道とそれほど変わらないのではないかと見る。

140年前、バードは人力車に乗って金山を出発したが、県境手前の及位（のぞき）からは歩いて山道を進んだ。途中激しい雨が降り、崖沿いの峠道では土砂崩れの恐怖もあったかもしれない。

峠を越えると院内だ。「紀行」の描写からは、ほっとしたバードの心情がうかがえる。

「院内への杉並木の下り道も、激しく流れる雄物川に包まれるようになった集落も、とても美しかった」（金坂清則訳注「完訳日本奥地紀行」）